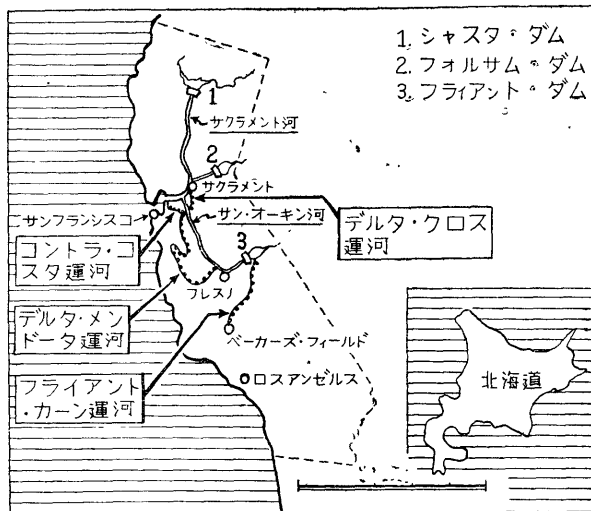


CVPをめぐる 政府と農民たち (アメリカ)

一九五一年は八月の第一週、カリフォルニア州北部のシャスタダムにスウィッチが入れられるや、満々とたたえられていた水は一時に堰を切つて落され、ナイアガラ瀑布の二倍もの水量が渦をまいて流れはじめた。豊沃ではあつたが周期的に水不足に悩んだセントラル峡谷に水をあたえるという六〇年間の夢がここに實現されたのだ。北はレッドینگから南はペーカーズフィールドにいたるまで、ブドウ、オレンジ、桃、アプリコット、米および棉花等の栽培農民が、水路を過ぎてゆく水に歡呼の聲をあげたのも宜なるかな。

このCVP (the Central Valley Project) についですこしふれておこう。同峡谷の南半部は、可耕地の三分の二を占めているのに植物の生長にもつとも重大な五―十月にほとんど雨がなない。そこで農民は多く井戸を掘つて地下水灌漑を行つてきたが、それも水量が次第に少くなつて、ますます深く堀らなければならなくなり、その費用も容易のものではなくなつてきた。ある場合には井戸一つ掘るのに二萬五千弗、一年の諸掛り五千弗を必要としてゐる。

南半部の水不足がこのようにひどいのにくらべると北半部はまだめぐまれているといえよう。サクラメント市以北では、同峡谷



カリフォルニア州CVP灌漑施設圖

(縮尺は500KM)

の三分の一しかないのに、降雨量は全雨量の三分の二を占めているからである。そこでCVPはつぎのような龐大な計畫をたてた(圖参照)。

(1) 北上していたサン・オーキン河の水を水源地のすぐそばのフライアントダムで堰き止め、これを南下させてペーカーズフィー

ルド市までみちびく、その間一五三哩にわたつて幅八十呎、深さ十五呎の運河をつくる。そして從來サン・オーキン河の水で用水していた地域には次のように處置する。(2) サクラメント河が海にそそぎこむまえのところで長さ五十哩のデルタ・クロス運河をつくつて南下させ、(3) トレーシーで十三萬五千馬力のポンプで二百呎の高さに水を揚げ、(4) それを延々一七哩にわたつて幅百呎深さ十六呎のコンクリート運河でフレズノ市近くまで南下させて、そこでサン・オーキン河の舊水路に注ぎ入れて再び北上させることによつて舊流域を灌漑させようという、いわば從來のサン・オーキン河と同じ運河を二本つくり、これによつて不毛地千六百萬エーカーを緑したたる沃野にするとともに、五千萬キロワットの發電を行うという複雑且つ大規模な計畫なのである。まづたくアメリカ的スケールをもつてしてでなければ、ちよつと考えもおよばぬところであらう。

これで農民が鼓腹撃壤して政府當局の恵みを讃えたかというところにあらず、そこにまたアメリカの悩みがあるというものであらう。

農民が灌漑用水を渴望していることはいうまでもない。それにもかかわらず彼等はそれにとまなう政府の監督や統制を一そう強く排撃したのである。そのうちでも開拓法 (the Reclamation Act) によつて連邦施設からの灌漑が單獨所有の一農場當り一六〇エーカーに制限されていることが問題の中心であつた。用水料金は一エーカー一呎當り三弗五〇仙で、カリフォルニア農民にと

カリフォルニア州 農場面積別農業構成 1945 年センサス

項 目	180 エーカー未滿	180～500	500～999	1000 以上	計
農 場 數(%)	84.5	7.9	3.1	4.4	100 (1394)
農 場 面 積(%)	11.1	9.1	8.1	71.7	100 (36百萬エーカー)
農 産 物(%)	52.2	17.0	9.2	21.7	100 (1.5億弗)

つてその額は些細なものであるが、もしそれ數千エーカーの農場であるとすれば、わずか一六〇エーカーの用水はまさにバケツの底の一滴にすぎなからう。當局はこの制限を少しゆるめるため、農場の保有をたとえば妻との共同ということにすれば、それぞれの者について一六〇エーカーを認めることにしているが、それにしても一農場當り三二〇エーカーで打切られる。たとえば上の表をみられる。カリフォルニア州の全農場面積の七割以上を千エーカー以上の大農場が占めている。もし彼等が欲しいだけの用水を自由に與えられるとすれば從來の農場内の不耕作地も耕地に轉換され、農産物もそれまでの二割強から飛躍的に増大し、その利益は尨大なものとなることは明らかである。大農達のお祭の集りにいつて彼等のいうことを聞いてみよう。リンカーン、

バックロード、キャディラック等の高級車が群つてゐる中で、皆が口をそろえていう、開拓法とは一體何だ。カリフォルニア開拓當初の一九〇二年にきめられた古着にすぎないじやないか。カリフォルニアは大人になつたんだ。そんな子供の服でいつまでも間にあるものか。復興局のお役人連のやることは、自由の國アメリカの生活様式をぶちこわすものだ、というわけである。時にはこれらのお役人のことを「共產主義者」「ファシスト」の冠詞をつけて呼ぶことさえ耳にすることがある。

にもかかわらず委員長シュトラウス、地方長官リチャード・L・ベークは法律を楯にとつて大農の要求に頑として應じない。というわけは、杓子定規に法律を墨守するというのではさらない。もしこのような制限をつけなければ、大農場の經營者がダムの水を残らず吸上げてしまい、とどのつまりは農場や灌漑用水のスペキュレーションをひき起して、政府や税負擔者の利益が侵されてしまふ、ということを恐れているからである。

かかる大灌漑施設が、政府の手によるとはいへ實現されたことは、ひとつにはそれを償却しうる農業内部の生産力の高さを示すものであらう。たとえば、前記の用水料は現施設費四億弗の八七%を六十年間で償却しうることと算出されたものであり、しかも農民はその料金についてはほとんど問題としていないからである。だがその施設の實現が政府の手をまたねばならなかつたことは、發達した生産力の必然的な趨勢として、もはやアメリカ農業に特徴的な個人經營の力のみではその擔當者たりえなくなり、したが

つて、その一部をより大きな社會的機關、ここでは政府の手にゆだねざるをえなくなつてゐることをしめすものであらう。それとともに政府の干渉が加わることはいうまでもない。それがいかなる形でなされるかは經濟體制と發展段階の問題である。たとえば唐突ではあるが、われわれは次のことを想起するであらう。エジプト的な氾濫灌漑水の管理が農民に排他的に君臨する基礎であつたこと、また中國の華南水田の灌漑機能の擔當が中世以降の華南に田主權を成立せしめたこと（西山武一氏「明代江南田主小考」農業綜合研究、昭二五年三月臨時號）、また徳川幕藩體制下の水田灌漑等々。

カリフォルニア州における 180 エーカー未満農場構成：1945年センサス

項 目	50 エーカー未満	50～100	100～179
農 場 數(%)	65.5	11.1	7.9
農場面積(%)	3.9	3.0	4.2
農 産 物(%)	28.6	12.2	11.4

灌漑面積を一六〇乃至三二〇エーカーに制限する CVP 當局のやり方はたんに小農の福祉の問題のみではない。自由競争の經濟體制のもとで、本来なら競争圏外に驅逐され、したがつてかかる體制の怨嗟者たらんとする彼等にいま一度競争しうる條件を與え、自由競争の經濟體制のうちに組入れることによつて、その體制の支持者の一員たらしめんとするものではないあるまいか。たとえば上の表にみられるようなカリフォルニア全農

場の二割をしめる五〇乃至一七九エーカー規模の層は、現在でも全農産物の二・四割弱を生産しているが、かかる層がますます競争力を賦與されるのみならず、さらに、全農場の六・五割強をしめる五〇エーカー未満層の一部にもその力を與えることになるう。

この灌漑面積制限にみられるような政策は資本主義の發展に必然的にともなう農業工業間、ならびに農業内部の各階層間に生れる摩擦の調節策としてあらわれ、その立場はいわば社會的總資本の立場とでもいいうるであろうか。だがそのやり方は、經濟外的な力を加えることによつて自由經濟的な體制を維持しようとするパラドックスにみちたものである。しかもかかる體制下の各企業は必ずしも社會的總資本の動きと軌を一にしない。政府の灌漑施設そのものが、すでに民間企業の權利を侵害するものとして太平洋ガス電氣會社から強く反對されている。相對立する各階層が等しく民主主義の名においてそれぞれ權利を主張し、ことごときにその結びつきを強めてゆくと同時にその對立をますます明白にうちだしてゆく。

ここで政府施設による灌漑面積制限論争をめぐる兩軍のラインアップをみよう。反對者はカリフォルニア商工會議所、ファームビュロー・フェデレーション、地區水利組合等であり、逆に支持者側にはA・F・L、C・I・O、アメリカ歸還兵委員會、アメリカ在郷軍人會、カリフォルニア・グレンデおよびいくつかの有力なカソリック福祉機關がある。いわば反對者側には商工企業者と

大農があり、支持者側には勞働組合、小農および社會福祉團體が結集している。政府の農業政策の眼目がいづこにあるか、ほぼ明らかであろう。だがそれは先にのべたごとくイギリス的社會化の途をとるものではなく、その基本はあくまでも自由競争の經濟體制を維持することにあり、その限りにおいて脱落せんとする者に競争力を賦與しようとするものであると理解される。

そのことはまた中農の動向をみるることによつて明らかとなるう。經濟體制が彼等に自己の力で立ちうるほどの餘裕を與えているならば、彼等は依然として從來のやり方に固執する。マルチン・G・グツニッチはユーゴスラヴィアからの移民で、一九三四年に葡萄栽培をはじめてから幾年かの苦況をきりぬけて今日では三百エーカーの模範的葡萄園を娘と二人で經營している。三百エーカーといえば、CVP當局の認めた一農場當り灌漑面積の限度内であり、したがつて自分の農場の全面積を灌漑できるわけであるが、でも彼はいう「かかる水利計畫は、たとえわれわれに水を與えてくれようとも、われわれの自發的な活動力を殺ぎ、企業精神を弱めるであろう。私はこのような政府の手になる制限を好まない。この國では、貧乏になる途も、金持になる途も、同じオポチュニティが與えられている。このような體制は維持されねばならないものだ。」

資料・ニューズウィーク・一九五一年八月六日號、一九四五年
農業センサス
(高橋伊一郎)